

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

|               |   |      |       |
|---------------|---|------|-------|
| 派遣者番号         | 28K24   | 氏名   | 奥山 健  |
| 研究主題<br>—副主題— | 学び合い、高め合う授業力向上コミュニティ化に向けて<br>—相互授業参観を通して共に学ぶ— |      |       |
| 派遣先           | 早稲田大学教職大学院                                    | 担当教官 | 遠藤 真司 |
| 所属校           | 板橋区立高島第三小学校                                   | 校長   | 石川 悦子 |

キーワード： 若手育成、OJT、相互授業参観、リフレクション

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

(1) 教員を取り巻く現状

東京都の公立小学校においては、団塊世代の大量退職によるベテラン教員の減少、それに伴う若手教員の大量採用により、全教職員に対する若手教員の割合が大変高まってきている。

今から 15 年ほど前は、若手・中堅・ベテランの人数バランスが均衡していた。経験豊富な中堅・ベテラン教員が若手教員に対し、授業づくりや教員としての在り方を教えたり、子供の日々の成長を話したりする機会が自然と生まれていた。その中で知識・技能の伝承が図られ、若手は日常の学校業務の中で資質・能力を向上させ成長していくことができた。

しかし、現在はベテラン教員が少ないため、比較的経験年数の浅く、層の薄い中堅教員が若手を指導・助言する必要性が高まってきている。中堅教員には学校運営に参画する重要な校務分掌が割り当てられることも多く、日々の業務に追われる中で後輩育成をするという使命を請け負う状況が生まれる。学校には「教員同士の学び合いの時間の確保が困難」という状況が生まれ、「学校全体の教育力が相対的に低下する」と言う者もいる。

これらの実態を受け、小学校現場において以下の四つの「不足」が見られると考えた。

- ①授業に向き合う時間の不足  
(教材研究、毎授業の計画・準備・省察・評価等)
- ②同僚間のコミュニケーション不足
- ③授業力を向上させる機会の不足
- ④これらの結果として教員の授業力不足

この中でも、学校教育の要である授業における教員の力量不足は、喫緊の課題であると考え。教員の年齢構成のアンバランス化のみならず、教育課題の多様化、教員の多忙化が言われる中、どうすればこの不足を軽減・解消することができるかを自身の研究課題として設定した。

(2) 実践対象校の実態把握から

授業力向上に関するアンケート調査を実施した。自身の授業力向上の方法として、「自分の授業を見てもら

う」、「他の先生の授業を見る」に期待感が高いことが分かった。そこで、毎日実践している「日々の授業」を貴重な研究・研修の材料とし、授業を参観したり、参観してもらったりする「相互授業参観」を通して後輩教員や同僚相互の授業力の向上の支援を図ることが有効ではないかと考えた。このように、校内組織の中で今ある時間と人材を有効に活用しながら主体的・自律的に授業力を向上させることが効率的・効果的であり、それが学校組織の学び合い、高め合う授業力向上コミュニティ化へとつながり、四つの不足を解消・軽減することができるのではないかと考えた。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 「校内相互授業参観週間

—見る 聞く WEEK— の実施

事前に調査・分析した「授業参観」を円滑に進めることを制限する心理的な抵抗感、時間的な制約等を提示し、その障壁の解消のために一週間だけ特別に「参観週間」として設定した。また、授業を見るだけで終わらないよう、「聞く」という文言を入れ、授業後のリフレクションの必要性を意識化した。

|                                   |                    |  |
|-----------------------------------|--------------------|--|
| 授業参観<br>することを<br>阻む<br>心理的<br>障壁  | 授業者からの拒否           | A 授業者から「入ってきてほしくない雰囲気」を感じる<br>B 嫌な顔をされてしまった昔の経験                                    |
|                                   | 授業者に対する<br>思いやり    | C 教室に入ると、迷惑ではないだろうかという不安<br>D 見てほしくない授業だったら申し訳ないという遠慮                              |
|                                   | 自分自身の<br>謙遜        | E 他人の授業を見に行くことは「偉そうでおこがましい」と思う謙遜の気持ち   |
| 授業参観<br>されることを<br>阻む<br>心理的<br>障壁 | 参観経験のなさ            | F 参観経験のなさからくるとまどい  |
|                                   | 準備・心構えの<br>なさによる困惑 | G 準備不足の時の緊張感<br>H この授業だけで評価されてしまうのではないかと<br>いう困惑<br>I 先輩としての授業を見せたいいけないという<br>プライド |
|                                   | リフレクション<br>のなさ     | J 参観されればなしによる不安<br>参観の目的・評価が気になる   |

図表 1 授業参観・被参観に対する心理的障壁 (A小学校 意識調査より)

(2) 授業力向上コミュニティ化に向けた土台づくり

「授業見る聞く便り」を発行し、参観した授業の様子やリフレクションを通して学んだこと等を伝えた。授業力向上・相互授業参観の意義の共有、同僚の授業力向上支援に対する意識向上等について全教職員を啓発した。

### (3) 授業力向上コミュニティのリーダー育成

中堅教員に対し、授業力向上リーダーとしての資質・能力の向上に向けた個別のアプローチを行った。特に、反省的実践家となるためのリフレクションの在り方に重点を置いた。

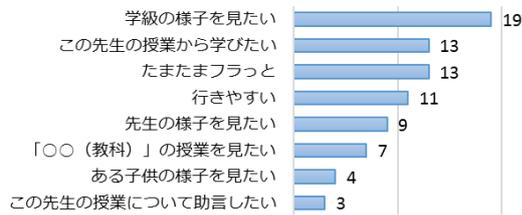
## 3 研究の結果

相互授業参観期間中は、ほとんどの教員が授業を参観に行くことができた。「安心して授業を見に行ける」といった声が多く聞かれ、有効であると考えながらも実践できていなかった授業参観に対する心理的障壁が一部解消されたと言える。しかし、授業後のリフレクションについては、実施したのは半数の教員のみであった。

授業力向上のためという目的意識をもって授業参観した教員は決して多くはなかった(図表2)。しかし、結果として指導法のヒントを得たり、自分の学級での指導に活かそうとする意欲を向上させたりすることにつながっており(図表3)、児童理解、教師理解の他に、授業力向上にもつながっていると考えられる。

期間終了後も自主的に授業を参観したり、ぜひ見に来てくださいと授業参観の案内をしたりする教員も見られ、相互授業参観の意味、意義が理解され、定着しつつあることが実感できた。

図表2 どんな目的でそのクラスを参観しましたか？(回)



図表3 授業を見に行ってもよかったことは？

- ・学級活動の授業を見て、自分ならどうするか考えた。今度自分の学級でやってみようと思う。
  - ・自分にはない様々な指導法をより分かりやすく学べた。
  - ・学級の雰囲気・子供や先生の様子がよく分かった。
  - ・子供の実態や発言に応じた発問を見られ、参考になった。
- 授業を見てもらってもよかったことは？**
- ・授業に対する感想やアドバイスをもらえて参考になった。
  - ・いい意味での緊張感がもてた。

## 4 研究の考察

- ・「相互授業参観週間」と銘打ち、期間を設定することで授業を参観しに行く意欲と安心感の高まりが見られた。参観週間後も継続的に授業を参観する教員が増えた。
- ・授業を見合うことの意義(授業力向上、児童理解、教師理解、学級理解、コミュニケーションの活発化といった同僚性の向上等)を見出し、学校全体で共有することができた。校内組織の中で今ある時間と人材を有効に活用すれば、十分に授業力を向上させることができるという

ことを認識できた。「授業見る聞く便り」が非常に効果的であった。この便りを今後、輪番での作成・提案としていくことも有効である。

- ・授業参観の目的が「たまたまフラット」であったとしても、参観した授業から授業力向上に関するヒントを得られると気付いた教員が多い。これが自主的・自律的な日常的な研修へとつながると考えられる。
- ・「後輩教員への指導・助言」を目的として授業参観していた教員は一名のみであった(図表2)。中堅・ベテラン教員が同僚を育てるという人材育成意識を更に高め、積極的に同僚の授業を参観して指導・助言したり、授業を公開したりする必要がある。授業力向上リーダーとの協力・連携がコミュニティ化に必要である。
- ・全教員が授業参観をできたわけではなかった。授業を見に行かないと、授業を見に来てもらえないといった参観・被参観の相関関係が見られた。本人にとっても同僚にとってもマイナスである。授業を見に行くことによって、授業を見に来てもらえるという意識をもたせたい。
- ・授業後のリフレクションの更なる活性化・質の向上を図ることで、授業力を向上させる研修としての意味を更に強めることが期待される。参観・被参観者間で事前に授業を見る視点を共有化しておくことも有効である。また、リフレクションを授業者と共にする側としては長期的なスパンで育成するという意識をもち、授業者の尊重を前提に、課題を自分で把握させ、自己省察へと導くという方針が効果的ではないかと考える。

## 5 今後の展望

授業力向上コミュニティ化に向け、相互授業参観の「日常化」、「授業力向上としての役割の強化」、「同僚性向上としての役割」が今後の課題であると思われる。以下、改善案を示す。

- ・相互授業参観週間を学期ごとに実施するなど年間を通じた活動にし、意識を持続させる。
- ・授業後のリフレクションを生み出すためにリフレクションをすることによる効果(授業力・同僚性等)を検証したり参観・被参観者間での視点を共有化したりする。
- ・授業参観・被参観に対する心理的障壁を更に解消するために、授業者側から「参観してもらいたい」意思を表示する。例えば、授業公開掲示板を作成するなどして、参観してもらいたい授業の日時を示す。これはリフレクションを通して自身の授業力の向上をねらう場合と模範的な授業として参観してもらおう場合との両面が考えられる。授業者にとっても参観者にとっても障壁がなくなり、有益となるようなものにする。冒頭で挙げた四つの不足の解消には、中堅教員のリーダーシップは欠かせない。中堅教員が人材育成意識、学校運営参画意識を高め、教員集団に応じた相互授業参観を立案することが期待される。

